漁師の父さん、やっと生き残る

～「津波」って大変なことなんだ～

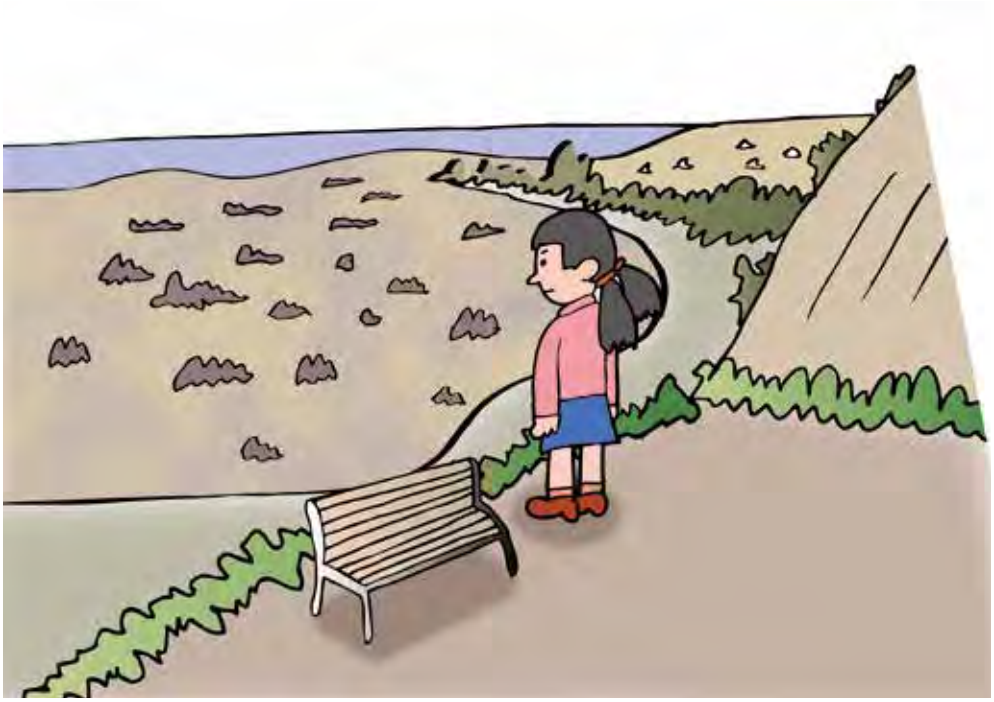
（釜石市 震災当時小学４年 女子）

避難する途中に海が見える広場があって、津波は自分たちも見たことがないから、「どんなんだろう」と思って見てみたら、海がありませんでした。

「何でないんだろう」って思いながら、そのまま津波は見ないで行きました。後から知ったのですが、その時は波が引いていて、海が見えなかったのです。

私のお父さんは漁師で、何日かたって生きていることが分かりましたが、津波にのみこまれて死にそうだったみたいです。やっと生き残ったんだという話をいっぱい聞かされました。私はびっくりしたというか、「生きていたんだ」とうれしかったです。

父さんと一緒にいた人が亡くなったことも聞きました。「津波」、「津波」って簡単に言っているけど、大変なことなんだなって思いました。



流された家の中で九死に一生

～津波は防災マップどおりには来なかった～

（釜石仮設団地 50代 女性）

揺れが止まるのを待って、仏壇を片づけたり、父親の写真が落ちたのでそれをタンスの中に入れたりしていました。でも、あまりにも家の前の国道をみなさんが逃げて行くので、夜勤明けで家にいた息子が「ちょっと防災センターを見てくる」と言って出かけて、戻ってくるなり「津波だ！」と叫びました。

足もとを見たらすごい水が来ていて、気がついたらもう水の上って感じで、母親と息子、うちの2階に逃げてきた妹夫婦と私の5人が家ごと流されてしまったのです。

メリメリバリバリバリバリッと家が壊れる音の中、車がヒュッと飛んで向かいの山にぶつかるのを見たりしながら波の流れにほんろうされていました。いったん流れが止まり、家が止まったんですが、今度は引き波で家が回転し、バリバリッと壊れながら海の方に引かれて行きました。

その後、次の津波が来た時にそのまま後ろ向きで陸の方に流され、お寺のすぐ前のところで何かに引っかかって止まりました。自衛隊に救助されたのは13日の朝でした。

私はいつも防災マップを意識していました。うちの辺りは津波が川の堤防を超えた場合の到達点だったので、ピチャピチャという状態を想像していて、３メーターの津波と報道された時にもせっぱ詰まった状態とは思わず、安心していました。それが家ごと流されるなんてね。想像もつかないことが起こりました。



きれいごとばかりじゃないけど、お互い様なんです

（釜石市 震災当時小学４年 女子）

最近、復興を支援してくれる人たちに絵を描けと言われて、流されていく人と家を描いたら、「描くな」って言われました。で、少しイライラしています。私は、「復興と言っても、きれいごとばかりじゃない」って、そう思うのです。

震災から２年以上たった今、ガレキとかを引き取る話の中で、「こっちに持って来られると放射線が・・・」とか言っていますよね。でもそれって、そっちの人もこの体験をしてもらえれば分かると思うんですよ。

災害はどこにでもあると思います。こっちだけにあるのではなくて、そっちの方にも絶対来ると思う。お互い様なんです。

そっちが大変な時にはこっちも助けるんだよってことを分かってもらいたいのです。



朝がたの小雨に油断

～台風に比べ危機感少なく～

（奄美市 70代 男性 地区役員）

あの日は全く、大雨の予想はしていませんでした。朝がたは小雨だったものですから、家内と畑でも行こうと言っていたくらいです。台風だったらもっと危機感をもっているんですけどね。

それが午前10時を過ぎて急に猛烈な雨が降ってきて、集落の80%近くが海みたいになって、道路は冠水し、家も全部床上浸水になりました。これは大変よということで、ほとんどの方は公民館に避難してもらいました。

道路が冠水で通行止めですよとか、誰がどこに避難していますよといった情報を地元のFMが放送していましたが、停電でしたから電池式のラジオを持っている人以外は情報が入りませんし、昼間で停電に気づかず全く異常を感じていなかった人もいました。

実際、青年団が避難していないお年寄りの家に行ってみると、「部屋の畳が浮き上がってきて初めて気がついた」と言われました。そういう人たちは青年団の連中におんぶされて避難しました。

降り始めは小雨でしたから、まさかあんな大雨になるなんて、誰も思っていなかったのです。



もし、私が残っていたら・・・

～できなかった大雨情報の把握～

（奄美市 60代 女性 介護施設職員）

悪夢のような１日でした。施設は認知症の方９人を抱え、そのうちの３人は身体的にも不自由で車いすが必要な方たちでしたが、２人の方が大雨の犠牲になってしまいました。

あの日、私が夜勤明けで家に帰って休んでいると、交代勤務の職員が道路の冠水やがけ崩れで来られなくなったとの連絡が入りました。私は「夕方の５時過ぎには戻るから、利用者さんが不安にならないようにケアをしっかりしてください」と残った２人の職員に頼みました。

その後も連絡を取り続けましたが、昼の食事の最中に一気に水が押しよせたとのことで、職員がそれこそ命がけで利用者さんの命を守ろうとしましたが、残念な結果となりました。

一番の反省点は、パソコンの前に座るなりして、情報を収集する術をもたなかったことです。もし私が残っていたら大雨の情報を早めにキャッチすることもできたかもしれませんが、交代要員が来られず、１人がおむつのケア、１人が食事のケアをしないといけない状況でしたからね。状況の把握まで手が回らなかったことが残念でたまりません。



一日前プロジェクト

みんなでやってみよう!

簡単な手順を紹介します

まず、過去の自然災害（地震、水害）の中から対象を選ぶ

↓

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

↓

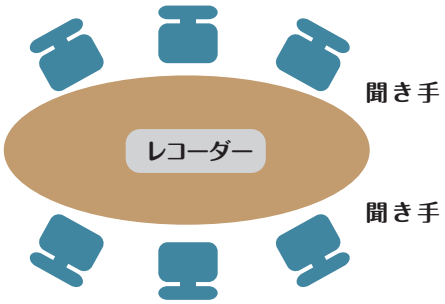
みんなが集う場所と時間を設定する

↓

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらう

※話し手は、2～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

↓

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする
※物語は、300～500字程度で、できるだけ切り口を残して編集
※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

↓

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき　共感　反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」 https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」（ https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ ）からダウンロードしてください。

発行 内閣府（防災担当）

〒100-8914　東京都千代田区永田町1-6-1（中央合同庁舎8号館）
TEL 03-5253-2111　URL https://www.bousai.go.jp